

西尾実先生が残されたもの

～下伊那教育会に光を照らし続けた人間西尾実～

西尾実研究委員会 旭ヶ丘中学校 松村正彦

1 はじめに

西尾実研究委員会では、今年西尾実先生（以下敬称略）の偉業をたどって6年目になります。昨年度は、国立国語研究所所長就任以後から下伊那教育会に西尾文庫ができるまでに焦点をあてて、信濃教育会の教科書編集の中心として活躍した姿、妻はる江をはじめとした親しい友との別れに際しての心情、そして、西尾文庫設立時における心からの援助から「教室の人」として国語教育の実践者でありつづけた西尾の姿を探りました。

そこで今年度は、西尾の最晩年である阿南第一中学校での講演から91歳で亡くなるまでの活動と、会誌「下伊那教育」西尾実先生追悼特集号に寄せられた多くの追想から、教育者として私たち下伊那教育会に光を照らし続けた人間西尾の姿を捉えていきたいと思います。

2 自らの生き方を伝える

(1) 若者に伝えた生き方

昭和44年10月15日、郷土である阿南町の阿南第一中学校の生徒に向けての講演で、父から教わったこととして「遠い道のりを歩くのにむだ足をしてはいけないこと。」「痛くてもかまわん。歩いていれば痛くなくなる。」「後ろの足を前へ、こういうことを続けていけば目的にたどり着く。」の3つを挙げています。そして講演の最後には「今中学校におられる諸君、高等学校へ進まれる諸君、あるいは、学校へ行かれなくても、中学校を出ていろいろな実務につかれる諸君も、その点で、本当の伝統を開拓して、いい生活を築くことに力を入れていただきたい。そのためには私は、何も知らない百姓だけをやっていた親のことばの中にも、なかなか私を導いてくれたものがあったということ、また諸君は諸君なりに参考にして、諸君の本当の生き方を考えていただくことができたなら幸せだ」と述べています。

阿南第一中学校の校歌作詞を依頼を受けて、今の阿南第一中学校の実態をつかみたいという西尾本人の希望から実現した講演会でした。これからの社会を担う若者に向けて、西尾の歩んできた生き方の根底に流れていたものを、わかりやすい言葉を用いながら伝えようとする姿に、人間教育を実践する西尾の思いの深さを感じます。

(2) 感謝の心の忘れない生き方

昭和45年11月3日の阿南町名誉町民授賞式でのスピーチでは、清水福市先生との指導方針の違いから、飯田小学校を去らなければならなかった西尾に、郷土の恩師である勝岡初弥先生が、大下条小学校の教師として熱心に誘ってくれ、半年もの間お世話になったこと、そして、そのときに父から東京帝国大学の合格通知を渡されたこと等に触れ、今日の西尾があるのは阿南町の皆様のご厚意の賜だと語っています。

目の不自由な中でも、今まで自分を支えてくれた故郷のみなさんに対し、誠心誠意の感謝の言葉を述べたいという西尾の故郷に寄せる熱い思いが、生涯の最後の旅として阿南の地を踏むことになったのではないのでしょうか。

(3) 教え子の語る青年期の西尾の生き方

西尾が教鞭を執った大下条小学校での半年間の様子を、当時教え子であった南島志計さんは **名誉町民授賞式にて**「黙っている先生だった。いることしかしゃべらん。」当時を振り返り、「何かくねっていた感じがした。」と語っています。このことは、当時24歳という青年であった西尾の、教師の内面とその多くの人間的な充実感の表れではないかと考えられます。さらに、学校を去ることになった女性教師に対しての送別の挨拶に、女子であった南島さんを指名し、送別の言葉も「長いことお世話様になりました、お通りの時はお立ち寄りください」との簡潔な文を提示してくれたとも語っています。

ここには、女性に対し同性を挨拶に立てるといふ相手意識のはたらき、簡素な文の中にも優しさと相手を思いやった表現であることから、西尾の国語指導の源流を垣間見ることができるのではないかと考えられます。



3 言語生活の指導

西尾は著書『日本人のことば』の中で、「ことばの通じ合いをよくするためには、われわれのことばの生活をよくする

